

〈高校生の部 佳作〉

いってらっしゃいのタッチ

福井県立武生商工高等学校 中井 美友

「パーンッ」

家中に響き渡るタッチの音。私の家では父が仕事に行くときに私達兄弟三人とタッチをする。私が物心つく前からしていて、それは高校三年生になった今でも変わらない。

中学二年生のとき、私は常にイライラしていた。反抗期というやつだ。

「ご飯できたで早く来て」

とご飯に呼ばれる少しのことでもイライラしていた。父が仕事に行くとき毎日タッチをするのに対しても、なぜ毎回しないといけないのだろうと思っていた。周りの友達はそのようなこととしていないのに。

ある日、そんな気持ちが爆発して父に怒鳴った。

「なんで毎回お父さんが仕事に行く度にタッチせんとかあんの？周りの子はそんな子供っぽいことしてないよ。なんでうちだけ。」

何かもつと言い返してくるかと思ったが、予想外の言葉が返ってきた。

「いってきます。」

父は一言そう言って出かけて行った。私は訳が分からず、後ろ姿を見送ることしかできなかった。なぜ私の言葉に対して何も言わないのか、疑問だけが残り腹が立ってきた。仕事から帰ってきた父はいつも通りで、私は何も言わなかった。今日怒鳴ってしまったから、もうタッチしてこないだろうと思っていた。しかし、次の朝、父が仕事に行くときにまたタッチする手を伸ばしてきた。私は予想外のことで一瞬固まった。

「昨日言ったのになんで。」

私はイライラして反抗した。しかし、また何も言わない。伸ばされた手を横切り、部屋に行った。私の頭の中は苛立ちと何がなんだか分からない疑問だらけ。それが約一年続いた。最初は反発して何か言っていたが、父は毎回何も言わないので半ば締め、何も言わず無視したり、なるべく会わないようにしたりしていた。

三年生の冬、受験が終わり心に余裕ができてから反抗期が徐々に落ち着いてきた。父との関係に変化はなく、どのタイミングで謝れば良いのか、どう接すれば良いのか分からず避けていた。そんなとき、母からある話を聞いた。

「美友も学校行くときって嫌でしょ？それは大人になってからも同じで私達も仕事に行

くの嫌なの。お父さんは仕事に行く前に三人にタッチしてもらってパワーを貰ってるって言った。」

この話を聞いて、今までの自分の行動、考え方が幼稚で恥ずかしくなった。私が何も思わず適当に手を叩いていたことが、父にとっては大事なことで、私は知らずに「与える」側になっていたこと。いや、「与える」側にしてもらっていたことに気づいた。私は謝る決心ができた。

次の朝、今更謝っても良いのか、何を話そうか、そんなことをグルグル考えていた私に父はまたいつも通り手を伸ばしてきた。私はその手に思いつきりタッチした。「ごめんなさい」「ありがとう」「頑張ってるね」いろいろな気持ちを込めて。驚いている父を気にせず、声に出して

「今までごめんなさい。いってらっしゃい」

父は一言

「いってきます。」

そう言った父は笑顔で嬉しそうだった。私は泣きそうになるのを我慢して笑顔を返した。それから毎日気持ちを込めて思いつきりタッチしている。今では弟とどっちがタッチで大きい音を出せるか対決までしている。ただのタッチだと思っていたが、「タッチでパワーを与えられる」とても素敵だと今は思う。きっとこれからもタッチし続けるだろう。思いを込めて。